
シャドウ・インメモリー

§ 遼我 §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャドウ・インメモリー

【Nコード】

N2922BA

【作者名】

§遼我§

【あらすじ】

幼馴染の『天野^{あまの} 或^{アル}』と関わらなかつたら……。

ひよんなことから、国家機密組織『エンシエント』に所属することとなった、ちよつと前まで一般的高校生『尾鷹^{おたか} 蒼空^{ソラ}』。

テロとか、表では良いけど裏では悪い奴とかを相手にし、エンシエントの中でも特別な部隊『ウオベル』に所属したソラ。

死と隣り合わせのこの職場で、蒼空は自分の意場所を見つけていく。

ガチのスパイとかエージェントをやります。銃の名前とか、あんまり気にしないでくださいねー。

プロローグ

額から、血の混じった汗がほほを伝って顎から地面に落ちる。幸い、地面は少し固まった泥だから、あまり音はしない。

麻酔銃を握る両手にも思わず力が入る。さつき確認した。今は赤いドラム缶の後ろに隠れているが、その向こうから歩いて来ている男は間違いなく標的者だ。

向こう側のドラム缶にはアイツがいる。アイツも汗だくだ。手信号で何かを伝えようとしている。

まずは、人差し指でオレを指差した。そして、ドラム缶の向こう側を指差した。その後、手を簡単なピストルの形にして、頭を撃ちぬくフリをした。さらに人差し指を立てて、「1」を表す形にした。

『おまえが一発で、相手の頭を撃て』

アイツが言いたいことはこういう事だ。射撃の腕には、確かに自身があるが、キャリアシヨウ経験上、アイツの方が先輩だ。

オレは人差し指でアイツを指した。その後、手をピストルの形にして、軽く、すばやく上に揺らした。

『お前がやれよ』

オレは手信号でそう伝えた。アイツは持っている麻酔銃を人差し指で指した後、親指と人差し指で「0」の形を作った。その後、まるで問いかけるような顔でオレを指差した。

『弾が無い。おまえの残弾は？』

オレは麻醉銃の残弾を確認した。その後、アイツの方に親指を立て、「OKサイン」を作った。

『十分だ』

アイツはオレの手信号を確認した後、頷いた。そして、指を3本立てた。「3」だ。その後、1秒ごとに2本、1本になった。

指が1本になり、1秒が経過した後、アイツが人差し指でドラム缶の向こうをすばやく何回も指した。

『GO！GO！GO！』

その合図とともに、アイツはドラム缶を飛び越えた。

「なに！？一体どこから！？」

オレはその声を聞いた瞬間、横に転がった。男の顔は一瞬しか見てないが、驚いているのは分かった。

パンツッ！

割と小さい倉庫の中で銃声が響いた。麻醉弾はこめかみに当たった。そして、相手は深い眠りについた。

「こめかみだったな。ま、大丈夫だろう。1tあるゾウでも3時間は眠る。それで、『蒼空』。残弾は？」

オレは麻醉銃をアイツ

『^{アル}或』に放り投げた。

「弾切れた」

シャドウイン
影の中の記憶 ^{メモリー}

プロローグ（後書き）

ちょっとエージェント・スパイモノの小説、書いてみました。まずはプロローグだけ書いてみたんで、コメントとかお願いします。頑張っています。

？ - ？

初侵入、失敗

窓から外を見る。

いやー、青いなー。雲一つねえや。

授業をまじめに聞かず、ソラは自分の名前の由来の空を見る。

『オレ、そんなにきれいじゃないのに』

心の底からそう思った。もちろん、きれいとは心の事だ。どちらかと言えば、けがれた心を持っている。自分で言うのもなんだけど。

彼の名前は、「尾鷹おたか 蒼空ソラ」。現在、16歳。健全な、どこにもいそうな一般的な高校生。ただし、他とは違う能力を持っている。

「一度覚えた事は、二度と忘れない」

幼少期に両親を通り魔によって失ったソラは、それをきっかけに記憶能力が格段に、いや。異常なほどに、上昇した。なぜかは、ソラ自身も分からない。自分がそれを解明できるわけもないし、誰かに聞いたこともない。

だから、ソラはやるうと思えば、勉学でもある程度上位をとれる。しかし、知能の上昇をソラは別に望んでいない。そうすれば、必ずしもではないが誰かの反感を買う。それに、周りから馬鹿と思われるている方がなじみやすいし、自分的にもそのポジションが好きだった。

当初はそんな軽い気持ちで馬鹿のふりをしていたが、現実はその甘くはなかった。

馬鹿なソラをみな敬遠の眼差しで見つめ、しだいに彼は一人にな
って行った。

「別に、いいし」

影でそう呟いていたのを、今でもソラは覚えている。今さら賢く
なるわけにもいかないし、と。

そんな彼を救ったのは、1人の少年だった。

金髪に染めた髪は、「悪^{ワル}」という言葉にふさわしかった。

ソラに手を差し伸べた、彼の名前は「天野^{あまの} 或^{アル}」。小学校までは
同じ学校であったが、別々の中学校に入り、すっかり存在を忘れて
いた、ソラの幼馴染である。

いくら幼馴染といえど、そのすべてが仲の良い関係にあるとは限
らない。彼らの場合、これと言って交流もせず、ただただ「幼馴染」
の肩書を持った2人だった。

ソラはアルに自分と同じ境遇のモノを感じた。他人^{ほか}との交流を絶
ち、自らのみで進もうとしているその姿。周りの目など気にせず、
自分がやりたいことをする。染めた金髪も、その象徴だ。

アルがソラに話しかけたことによって、ソラには居場所が出来た。
アルとなら、何でも話せるし、アルにしか話せないこともあった。

2人は都合の合う日だけ、一緒に帰っていた。親友と言うにはま
だ少し遠かったが、それでもアルは紛れも無くソラの友達だった。

そんなある日の事。

いつものようにソラはアルに近づき、こう言う。

「帰ろうぜ」

いつもなら、「OK」とか「分かった」とか、とにかく「了解」の返事を言うのだが、今日は違っていた。

「ゴメン！今日はちょっと別件があつて」

いつも帰っていても、これは別に珍しい行動ではなかった。週に一度あるかないかぐらいのペースでこの会話は行われる。

しかし、ソラは気付いていた。

何か隠している。必ず、だ。今週だけでも、5回、1人で帰らされている。別に腹は立たなかったが、不思議に思うだけだった。

尾行スタート。

アルは校門を出た後、いつもの道を普通に歩き始めた。10m後には、ばれないように隠れながら歩くソラがいる。

途中まではいつもの道だったが、アルは突然、ソラが知らない道に入る。ソラは途中迷いながらも、アルが行きたいと思わしき目的地に着いた。

そこは倉庫だった。コテージのように、いくつも倉庫が横並びしている。アルは、右から2番目の倉庫に入って行った。ソラもそれに付いて行って、倉庫に入った。

倉庫の中は、意外と明るかった。天井には左右5個ずつ、合計10個のランプが吊られている。赤色や青色のドラム缶、他にもクレーン車や、シヨベルカー。巨大な鉄パイプまで。

ソラは、映画で見たようなスパイのような動きをし、物陰に隠れながら動いた。ドラム缶の後ろから、別のドラム缶、クレーン車に、とか。

入ったのはアルより少し遅れたからかも知れないが、アルはどこにもいない。いや、人すらいない。ソラはそれでも周りを警戒して進み続けた。

『階段だ』

そう、ソラの前には、二階　二階と言っても少し上に出来たベランダのような場所だ　へ続く階段を見つけた。ソラは不思議に思いつつも二階に上がった。ここからなら倉庫全体を見渡せるが、誰かがいるようには思えない。

と、その時。

倉庫の中心が、スポットライトで照らされた。そこには、椅子に座った、小柄の少し金髪の薄い中年の男が座っていた。しかし、ただ座っているわけではない。男は両手を後ろに回さされ、縛り付けられてる。

「出せ！おれをココから出せ！」

男は喋るたびに首の向きを変えている、相手がどこにいるのかわからないのだ。それと、男の喋り方にはフランス語に近い発音が感じられる。おそらくフランス人か、フランスに留学していた外国人にしても、日本語がうまい。

「それは出来ないな。ミラノスパッチオ」

暗闇から、30代男性が現れた。「ミラノスパッチオ」、それは、男の名前。

「何が目的だ！言ってみろ！」

「“ヒュドラ”はどこにある？」

聞いたこともない名前だった。どこかで聞いた気もするが、それが一体何を示しているのか、ソラには理解できなかった。

「教えるものか！教えるぐらいなら死んでやる！」

そう言われると、30代の男はポケットから何かを取り出した。スポットライトで黒光りしている。そう、あれは間違いなく。

『銃！？』

そう、それは間違いなく銃だった。しかし、ソラは映画でよく見るような銃を間近で見て、恐ろしさを感じていた。

「そうか、なら死んでくれ」

銃口がミラノスパッチオに向けられる。

「ど、どうせ偽物だ。おれは口を割らん！ヒュドラの場所も教えん！」

30代の男は、それを聞き終えた瞬間に銃口を天井に向け、天井のランプを撃った。本物だと思わせるためだ。

「次は君だ」

もう一度、銃口がミラノスパツチオに向くと、彼は焦り出した。

「分かった、分かった！キメラの場所は実際のところ、私も知らないんだ。許してくれ！」

パンツッ！

銃口から飛び出た銃弾は、ミラノスパツチオのほほをかすりそうになって、コンクリートの地面に当たった。ミラノスパツチオは、銃弾のとんだ方向は見ず、ただただ少量の煙を出した銃口を見ていた。

「分かった、分かった！言うよ！ヒュドラはアメリカ！ニューヨークのどこかだ！本当だ！それしか知らされていない！」

アメリカ？ニューヨーク？ならなんで日本でその話をしている？ソラには分からなかった。ここにきて分からない事だらけ、いや、分からない事だけだ。

30代の男はそれを聞き終えた瞬間に銃を持っていない左手をコートの中のポケットに入れ、瞬間的に銃を取り出した。だが、右手で持った銃とは形が違う。何だか、銃口の部分が長く、全体的に細い。

パンツッ！

銃弾はミラノスパッチオの胸に命中した。ミラノスパッチオは撃たれた瞬間に目をつぶっていたが、何秒か経過して、は目を開け、胸を見た。

「麻醉……銃……か……」

そう、30代の男が持ち出した、銃ではない。いや、銃ではあるのだが、非殺傷の、麻醉銃なのだ。現に、ミラノスパッチオの胸に刺さっているのは、ドングリのようなそこの銃弾ではなく、麻醉薬の入ったカプセルがついた、「針」だ。

ここにいたつても、ソラには理解できなかった。“ヒュドラ”と呼ばれる物質が彼らを動かし、特に椅子に縛られているミラノスパッチオはそのカギを握っている。そして、30代の男はヒュドラのある場所を聞き出し、それはアメリカのニューヨークにある。なら、これから30代の男はニューヨークに行くのか？

すると、また暗闇から誰か出て来た。しかも、2人。1人は厳いかつい顔をした30代半ばの黒人男性。もう1人は20代前半の日本人女性。

「案外、簡単に吐いたな。信じるのか？」

黒人男性が、腕を組みながら言った。目をつぶって聞けば、外国人だという事はバレないぐらい、日本語がうまい。30代の男は麻醉銃に息を吹きかけるなどをしながら、喋り出した。

「どつだろつな、おそらく間違いないだろつ。こいつはそついう奴だ」

「あら、ずいぶん自信ありげね。お子様のくせに」

「その呼び方はやめてくれ」

お子様？ここから、いや、どこから見ても、30代の男の方が年をとって見える。それに、お子様っていう言い方もおかしい。

「なあ、いい加減脱いだらどつだ？接しにくい」

黒人男性が言った。30代の男は「そつだな」と言つて、麻醉銃をもつ一度右ポケットに入れ、左手を首の右の付け根の方に回した。

そこでソラが見たモノは。

30代の男はそのまま、指を上にあげ始めた。しかも、ただ上げているのではない。皮も一緒に、まるでマスクでもかぶっていたかのように取っていく。

しかもそれだけではない。マスクをとると、そこには見たことのある金髪。

いや、まさか。そつだ、そつだ。

『“アイツ”だ』

まだ、声は30代の男の声だ。すると、その男は、振り返り、まっすぐソラの方を見た。

パンツッ！

また男は麻酔銃を撃った。しかも、今度はまったく関係のないソラを。

ソラはそのままひざをつき、倒れた。眠たくないが、何だかまぶたが重い。そして、ソラは驚きの光景を目にした。

男は、首に張り付けた、縦1？、横3？の長方形のチップをとった。さっきまでは、マスクで見えなかった。

「よお、ソラ」

その声は紛れもなく、アルの声だった。

? - ?

初説明（前書き）

これからシビアな用語が登場する気がしますが、詳しい事はあとがきに書いてますんで。設定として或^{アル}が説明してください。

それと、1話に1人のキャラクター説明とかしていきます。

アル > イエイ!

? - ?

初説明

麻酔銃で撃たれたことは、もちろん過去に無いことで、蒼空^{ソラ}は今でもその感覚を覚えている。

なんで自分は撃たれたんだろう？
最初からバレていたんだろうか？

「よお、ソラ」

薄れゆく意識の中で、はっきりと確かに聞こえた或^{アル}の声。しかも、麻酔銃から飛び出た針は、まっすぐ飛び、ソラの額に直撃した。注射か、それより細い針が当り、痛いという感覚よりもそれより早く眠ってしまった。

何だかヤバい事に巻き込まれた感覚のソラであった。

〜約4分経過〜

ソラはまだ眠っていた。普通、一般の麻酔銃は5分かそれ以上の時間、眠りにつく。しかし殴られたり、とにかく眠りを妨げるようなことをした場合、眠りから起きる。

「い！ きろ！ ったく、ソラは麻酔に わいのか

? 起きろ！」

ソラは、何度か聞き覚えのある声を聞いた後、ゆっくりまぶたを開けた。

「おっ！ やつと目を開けた！」

「ア……アル？」

ソラと目の合ったアルは、ホッとため息をつく。

次第に、ソラは完全に目を覚ます。どうやら自分はその二階の場所まで倒れていたままだった。

ソラは両足を曲げ、手で地面をつく。体を起こしたソラには、アルの声やアルの戦闘服のような服装以上に気になる音があった。耳の奥によく響く、この音。

「アル、なんでこんなに銃声が聞こえる？」

そう。麻酔から起きたばかりで五感すべてがおかしい気もするが、確かにソラには銃声が聞こえた。それも、何十回も聞こえる。まるで何人もの人間が銃を撃ちあっているようだ。

「いや、これはこれで訳アリで」

「そんな事は分かっている。あれから何があった？」

「記憶力の正しいお前に説明するのはどうかと思うが、あのミラノスパッチオ。ほら、イスに縛りつけられていたフランス人だよ」

「フランス人という情報は初めてだけだな」

「で、あいつはまあ、特別な場所に送っただけだ。アイツの手下が来やがって！それからもうドンチャン騒ぎなワケよ」

『ドンチャン騒ぎ』なんてレベルじゃないと思うけど、ソラは思う。

「なるほど、だからこうやって銃撃戦が」

「状況理解がお早いようで」

そう言ったアルは、ソラを見ながら笑っている。ソラは目をしかめて問う。

「何がおかしい？」

「いや、お前の額ひたい。麻酔弾タム、刺さったままだ。見てみな」

アルはごそごそ戦闘服の何十を越えるポケットの中を探った後、右腰のポケットから長方形の小さな鏡を出した。鏡以外にも機能はありそうなトコロにソラは戸惑ったが、アルに手渡された鏡を見て、無表情に驚く。

「なんだ、この赤い手形は？」

ソラは鏡を見ながらアルに問う。ソラは分かっている。アルが自分の顔に何度も張り手をしたことを。

「ソラ、麻酔に弱いんだもん」

「まあ、どうでも良い。どうやればココから抜け出せる？」

額に刺さった麻酔弾を抜きながら、あまりにも冷静に問うソラにアルは驚いた。ソラがこんなにも状況理解の早いヤツだなんて。普通なら、もつと状況を聞くはずだ。

「まあ、敵全員を倒すしかないな」

「じゃあ、武器をくれ。オレも戦う」

ソラは、少し冷静にアルに手を差し出す。

「OKです！ なワケあるかア！」

「なんで？」

あまりにも冷静に聞くソラにアルはあきれないようにため息をつく。

「あの一。そんなことしたらオレが怒られるよ。分かるだろ？一般人であるお前を巻き込むことは出来ない」

「それならもう手遅れだ。“銃撃戦かなんか”で、オレは麻酔銃で額を撃たれてる」

「銃撃戦かなんか」の部分強く言ったソラに、アルは苦笑いをする。

「まったく、面倒くせえな。オレが怒られるってんだ。まあ、良い。協力してもらおう」

アルは腰に巻いてあるベルトにつけてある銃を取り出した。

「変な形だな。これも麻醉銃か」

ソラはアルから渡された麻醉銃を見て思い出す。それは30代男性にアルが変装していた時、ミラノスパッチオに撃った時の銃と同じ。一般的な銃より、銃口部位が長く、全体的に各部位が細い。

「そうだ。この上の部分を自分の方に引く。その後、相手に銃口を向けて引き金を引く。いいな？あと、狙う場所は」

「頭、だろ？それぐらい知ってる」

「補足させてもらうが、できるだけ頭だ。麻醉銃の場合、何処を狙ってもある程度効果はある。頭を撃つなら1発。他の部位を撃つなら2、3発。良いな？」

「OK。で気になるんだが、オレとアルはこの戦いによって怒られると思うが、それを防ぐ方法は？」

アルは小悪魔のようにニヤリと笑って言う。

「完全勝利につき免罪^{めんざい}だ。行くぞ！！」

そう言ってアルは、二階にある落下防止の鉄パイプの手すりをつかみ、一階に飛び降りた。

「わお。やるー！んじゃ、オレも！」

昔から、身体能力には自信があったんだ。
ソラは落下防止の鉄パイプの手すりをつかみ、アルに続いて一階に飛び降りた。

（10秒後）

落下した後、ソラは右足首をさすりながら麻酔銃を見ていた。

「右足だけで着地するからだ。両足で着地しろ。それと」

同じドラム缶の後ろでソラとアルは話し合っている。

「麻酔弾が無くなったら言え。マガジン弾倉を投げるから、ナイスキャッチを期待してるぜ」

ソラは難しそうに麻酔銃を見つめる。

「ちょ、ちょっと待った。マガジン？何だそれ？部位で言ってくれ、部位で」

アルは自分の持っている麻酔銃をソラに見やすく説明し始めた。

「いいか？まずココのボタンを押す」

手で持つ部分に銃全体と同じ色の直径5？ぐらいの円のボタンがある。これを押すのかと、食い入るようにソラはアルの麻酔銃を見

る。

「そうすれば、ここからマガジンが出てくる。良いな？」

手で持つ部分にある、言わば銃で相手を撃つ時に地面と平行になる部分から、長方形に似たものが出て来た。これがマガジンだ。

「麻醉弾が無くなったら、他のマガジンと取り換える。そして、またさっきの説明と同じようにする。良いな？」

麻醉弾がマガジンの中に縦に入っている。弾が無くなればこれが空になるのかと、ソラは思う。

「ああ、それと他の人はもう戦っているんだな？」

ソラが言っているのは、アルが30代男性に変装していた時に一緒にいた、黒人男性と、日本人女性の事だ。

「ああー。アレスと小春コハルの事だな？大丈夫、あいつらはこの道のプロだ。もちろんオレもな。心配はいらない」

アレスが黒人男性。コハルが日本人女性だろう、ソラは理解しながら聞く。

「分かった。このイザコザが終わったら、晩飯メシ、おこれよ」

「ハハッ、そりゃキツイ」

ソラとアルはその後、ぴったり目があつた。

「死ぬなよ」

「おいおい、さっきも言ったがオレはこの道のプロだぜ？心配無い。お前も死ぬな。死んだら、おごるはずの晩飯も食えない」

「よし、いけ！」

その合図とともに、ソラはドラム缶の右側、アルは左側に走った。汗ばむ手で麻酔銃を握ったソラの目は、妖しく光る月のように野獣の血のように 紅く光っていた。

? - ?

初説明（後書き）

どーもー。アルです！

今回は、物語の主人公、尾鷹^{おたか} 蒼空^{そうら}について、説明していきましよう！

尾鷹 蒼空「オタカ ソラ」

男性 現在（2話時点）16歳

特技「？永久記憶……一度見た、聞いたことは二度と忘れない。

しかし、意図的に覚えようとしなければ、効果は無い。

悩み「？現在状況……」

ソラ>アルに関わって無ければこんなことにはなって無かったんだ！

歴史「？両親殺害……8歳の時、通り魔事件により、両親を殺害された。その日を境に、ソラの記憶力は以上に発達し、人類が到達できないレベルにまで成長する。ソラは今でも、この通り魔の事を憎んでいる。

以上、DJアルでした！また次話で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2922ba/>

シャドウ・インメモリー

2012年1月13日23時50分発行